

Cowboy Poetry 考察その2： ”カウボーイはつらいよ！”

山口 豊

1 カウボーイ像

あなたがカウボーイであったり、またはカウボーイの親しい友人がいるのでもなければ、カウボーイが実際どういった人たちなのか、また彼らの生活がどういうふうなのかを知るのには難しい。我々のまわりにあるカウボーイたちの姿のほとんどは、偶像化されたものである。世の中はカウボーイもどきであふれ、日本にいたるからあたりまえだが、真のカウボーイを見つけるのは困難である。特に最近の若者たちがファッションとして身につけるウェスタン風の帽子や、その他の衣服や靴などを見ると、カウボーイたちの姿（「かっこう」と言ったほうが良いかも知れない）がどこか一人歩きしている感じがある。最近よくテレビに出て、いろいろな分野での意見を述べているテリー伊藤（もはや若者ではないが、若者文化に理解のある）など、その代表のようなものだろう。

だが、そういったウェスタン・スタイルの流行は、実はカウボーイたちのことや彼らの文化を理解してのことではなく、単に我々日本人が憧れるアメリカという国の文化の顕著な一部分を模倣しているのみである、のではないか。つまり、アメリカっぽいことがかっこいいことであり、そういうものはなんでもまねしてみようという、そんな風潮がある。そういう意味でも、アメリカの黒人文化を特に好み、本国ではもうあまりはやらないみたいであるが、アフロ・ヘアにする日本人の若者が最近現れてくるのも不思議なことではない。アメリカでアフロ・ヘアが特に流行ったのは、黒人たちを中心とした公民権運動の盛んな時代、1960年代後半から70年代に、黒人であることの誇りを誇示し、アフロ・スタイルの髪の毛をのびした頃である。彼らはそんなまじめな時代背景や、問題を理解しているのだろうか。まったく日本人はアメリカっぽいことはなんでも好きなのである。

さて話をカウボーイのことに戻すが、いったい我々はどれくらい実際のカウボーイたちのことを知っているのだろうか。どうしてもカウボーイというと、あのテンガロン・ハットをかぶり、腰に銃をぶらさげほこりっぽい西部の町に、または荒野に現れる白人の姿を想像してしまうようである。早撃ちの名人や投げ縄の名人がまるでカウボーイであるかのような。古い世代については特にそうである。私の父は、いわゆる西部劇ファンで、ジョン・ウェインなどの出る映画を見

るのが好きである。先日「アラモ」(ジョン・ウェインが出ているかどうか知らないが)のビデオを借りてきて一人で見ていた。だが実際どのくらいアメリカ西部やカウボーイのことを理解しているのはわからない。「水戸黄門」も欠かさず見ているくらいだから、きっとそれと同じレベルでそれらの西部劇を見ているのだろう。つまり、ドンパチとかチャンバラとか、正義が、たいがい数では負けるのだが、実際負けそうになって、それでもしまいはなんとか悪を倒してめでたしめでたしのような、そういう話しが大好きなのである。

どうやらこういった話の内容や展開が好まれるのは、万国共通のような感じである。例えばクリント・イーストウッドのようなハリウッド映画の英雄像は、どこの国にでもあるのではないか。だが、”泣けるぜ、”クリント・イーストウッドはただの(もちろん偉大であるが)俳優であり、彼の演じるカウボーイ像は実像からとはかけはなれている、と考えるべきである。あれはみんなが喜ぶ、作り上げられたヒーローの姿なのだ。

西部劇映画などに現れるカウボーイは、いわゆるアメリカン・ヒーローの典型的な姿だ。彼らは、ウェルズさんの言葉を借りて言えば、金持ちでもなく、権力者でもなく、目立ちたがり屋でもない。粗野だが悪人ではなく、困っている人を助ける、孤独で陽気な自然人なのである(ウェルズ 1998)。日本で言えば、さながら時代劇に出てくるねずみ小僧や桃太郎侍のような、お父さんたちが喜ぶような英雄たち。銭形平次などはまるで、西部劇の保安官そのものじゃないか。

2 ア・ピース・オヴ・カウボーイ・ポエトリー

カウボーイたち自身は、人々が「カウボーイ」に対して抱くイメージにとまどいを感じる。人々に偶像化されたカウボーイの姿と、現実のカウボーイの姿に大きなギャップがあるからだ。彼らは嘆く、「俺たちは実際あんなんじゃないんだ。カウボーイってのはそんなカッコいいもんじゃねえし、ほんと楽じゃねえんだよ。」と。さて、カウボーイがそんな嘆きをつづった次の詩を読んでみよう。

IT AIN'T EASY BEIN' A COWBOY

BAXTER BLACK

It ain't easy bein' a cowboy
like the Marlboro man
'Cause the public expects us

to all be from Texas
And roll cigarettes with one hand.
an' I don't even smoke!

Hollywood painted a picture
they like to perpetuate
The streets of Laredo
still echo his credo
That a cowboy always shoots straight.
an' I can't hit the broad side of a buffalo!

Then Nashville improved on the image
so now a cowboy can be
All illegal alien
like Willie and Waylien
Or a soap opera retiree.
an' I can't even sing!

I envy that smooth urban cowboy
whose dance card always seems full
I'd almost be willin'
to take penicillin
Or ride the mechanical bull.
'cause I'm tired of kissin' my horse!

It's hard to compete with Casey Tibbs,
Louie L'Amor and John Wayne
When the best that you've done
is a buckle you won
Worn smooth since that youthful campaign.
now I can't read without glasses!

The twentieth century cowboy,
what I'm supposed to be;

That rare combination
 of civilization
 And Jessie James on a spree.
 but like I said . . .

It ain't easy bein' a cowboy
 so I've made myself a vow
 To avoid inspection
 and public rejection
 I'll jes' stay out here . . . with the cows.
 hell, if it was easy, I'd be somethin' else!

(from Baxter 1986: 30)

この詩の作者、ブラック・バクスターは、アメリカで（つまり世界で）最も人気のあるカウボーイ詩人である。彼の詩は現実と、「死んだ人をも笑わせる (Washington Post Book World)」ほどのユーモアにあふれている。ニュー・メキシコ州生まれで、1969年に獣医学博士の学位を取り、西部の飼養場や牧場で仕事をしてきた彼だが、1983年からはフル・タイムのカウボーイ詩人として活躍している。詩集も数冊出版され、テレビなどにも出演し、全米で知られる顔となった。

長年のカウボーイたちとの交流や、自分自身の牧場などでの仕事を通して、彼はカウボーイの現実を良く知っている。そして世の中に、ユーモラスに、時にはポリティカルに語りかけるのである、「カウボーイはつらいよ!」、と。かつてよく煙草のコマーシャルで描かれたカウボーイ、「マルボロ・マン」などではないのだと。彼は現在コロラドに住み、今でも古いカウボーイご用達のピック・アップ・トラックを愛用している。写真で見る彼は、両端がびよんとはね上がった口ひげをたくわえ、あの象徴的な帽子をかぶった、まさにカウボーイの姿である。

さて、「カウボーイ」のことを私はここで、語っているわけだが、私自身はもちろんカウボーイでもなければ、カウボーイの友達がいるわけでもない。アメリカ西部を旅行した経験は過去に何度かあるが、ぜんぶ合わせてもひと月にもならないだろう。実際カウボーイの人たちと交流を持った覚えもない。だから私はカウボーイのことを語る資格はないかもしれない。だが実に興味深い人たちである。私はなぜか、20才ぐらいの時から、カウボーイ・ソングにひかれ、歌に描

かれる光景を想像し、自分もカウボーイになりたいと思うようになった。東京に暮らし始めてしばらくしたころである。都会を嫌い、田舎の牧歌的な風景を愛するようになった。オートバイに乗り、週末は東京を脱出し、近隣の田舎の風景にとっぷりつき、夏には北海道を長期間旅行したりした。キャンプにたき火、ウイスキーと星空の夜を、ロンサム・カウボーイの気分で過ごした。昼間は牧場の間を通る道路を走りながら、いつかはアメリカで、本当のカウボーイのように馬に乗り、牛を追って生活してみたいと思うようになった。残念ながらいまだその夢はかなっていないが。

なにしろカウボーイのことを知るには、実際にアメリカ西部にカウボーイをしに出かけるのが一番である。カウボーイの仕事をし、牧場での生活をしてみるのが、できればそうしたい。だが日本に住んでいて、そんなこと簡単にできるわけがない。それでもカウボーイに興味がある、実像を少しでも知ってみたい、カウボーイの「思い」を思い、「感じ」を感じたいと思うのなら、カウボーイ詩を読んでみよう。つまり、カウボーイのことを知るには、カウボーイ詩を手に入れて読んでみるのが二番である。カウボーイ詩には彼らの実像が描かれている。彼らの生活、文化、思想、価値観、哲学、全てが描かれている。カウボーイたち自身が、自分たちのために、自分たちのことを書いた詩には、彼らの真の姿が現れているのである。それは、彼らが自分たちの真の声を、文字にたくしたものだ。その声を記号化した言語は、ユニークで実に興味深い。カウボーイ詩における言語の研究は、ここでは扱わない。もし興味があれば、社会言語学の観点でとらえたものであるが、私が昨年この論集に書いた論文（山口 1999）と、私の修士論文（岩手大学の図書館にあります）があるので参考にしてもらいたい。

3 カウボーイの歴史

カウボーイ詩はカウボーイの歴史と共に歩んできた。そもそもカウボーイということばができたのは、19世紀の半ば、開拓の最中のアメリカ西部でたくさんの牛が放牧されはじめ、それにともなってたくさんの男たちが牧童として雇われた頃であった。正確に言えば1867年のことである。ジョー・マッコイというカンザスの Abilene という町をほとんどまるごと買ってしまった金持ちの家畜業者が、テキサスに半ば野生状態で放置されていた牛を、当時カンザスのその町まで来ていた大陸横断鉄道の駅まで連れてくるために5千人以上の男たちを雇ったのが始まりだ。もちろんそれ以前にもアメリカ西部ではネイティブ・アメリカンやメキシコ人によって牛の放牧はされていたが、この時マッコイに雇われた男たちが「カウボーイ」と呼ばれ、それが現在の「伝説的な意味合い」を伴った

「カウボーイ」ということばの起源となっているのである (Flexner 1976:109)。

ウェルズに(1998)よれば、当時テキサスの人口は非常に少なく、牛の需要も低く、一頭の価値も当時3～4ドルだったそう。それを人口の急増する北部や東部に運んで高く（およそ10倍の値段）売ったわけだから、ジョー・マッコイはそうとう儲けたにちがいない。彼は Cattle King (Carol King ではない) と呼ばれたくらいだ。だがカウボーイたち自身はどうだったろう。実際の彼らは、その仕事の大変さのわりには、決して金持ちになったわけではなかったし、我々の抱くカッコいいカウボーイ像とはかけ離れた、悲惨な人生を送った者も多い。ウェルズによると：

馬を操りながら牛の大群を制御する仕事は、技術を要する重労働だった。牛の群に川を渡らせるのは容易ではなかった。また、水に乏しい大平原を、コヨーテやガラガラ蛇、嵐、砂嵐等の自然の危害と家畜泥棒を避けながら移動する長旅は、危険で苦痛だった。カウボーイの多くは家族を持たない独身者で、牛を追って太陽の下を黙々と進みながら、単調で孤独な日々を送った。病人もよく出た。(1998: 51)

そんな彼らが、一日の仕事の後で、仲間とキャンプの火を囲み、歌ったり、語ったり。それが歌や、物語や詩になって現在に残っているのである。ロング・ドライブのあとの「冷たい(?) ビール」や「女」を夢見ながら、何週間も何ヶ月も馬に乗り、牛を追う旅を続けたのだ。そんな毎日のきつい労働、そして彼らの生活の記録が彼らに歌い継がれた歌や詩に残されている。

カウボーイ詩は、いわば、彼らの伝統文化である。ここに当時のカウボーイのロング・ドライブ、孤独なロング・ドライブであるが、その様子を描いた古い詩がある。1885年に出版された詩であるが、その何年も前からカウボーイたちに歌い継がれていたものだ (Cannon, 1985)。最初の4スタンザを紹介しよう。

THE COWBOYS SOLILOQUI

ALLEN McCANLESS

All day o'er the prairie alone I ride,
Not even a dog to run by my side;
My fire I kindle with chips gathered round,
And boil my coffee without being ground.

Bread lacking leaven' I bake in a pot,
 And sleep on the ground for want of a cot;
 I wash in a puddle, and wipe on a sack,
 And carry my wardrobe all my back.

My ceiling the sky, my carpet the grass,
 My music the lowing of herds as they pass;
 My books are the brooks, my sermons the stones,
 My parson's a wolf on a pulpit of bones.

But then if my cooking ain't very complete,
 Hygienists can't blame me for living to eat;
 And where is the man who sleeps more profound
 Than the cowboy who stretches himself on the ground.

(from Cannon eds. 1985: 1-3)

4 カウボーイ、トゥデイ

だがそんなカウボーイの生活も、現在では大分変わってしまった。西部はもはや人の住まない広大な未開拓地ではなく、今や、どこにいてもそこにすむ人々が「ここは我が領地」とフェンスを張りめぐらしている。昔ながらのロング・ドライブは不可能となった。今や「古き良き時代」を懐かしむのみである。まったく、古き良き時代からのカウボーイたちにはやりにくい時代になった。そんな現実が次の詩に書かれている。

GO AND JUST BUCKAROO

LEON FLICK

They say with barbed wire came the fall of the West,
 I ain't denyin' it's true.
 'Cuz there's few places left, in this once empty West,
 you can go and just buckaroo.

But you follow a fencee and you'll find gate or hole,
and there you can wander on through.
But the days are gone, when you took horse and tack,
and could go and just buckaroo.

For the East runs this land, and they don't understand
about cows or our points of view.
They don't even care if they're playin' square,
or care bout some lost buckaroo.

But throw the gate wide, 'cuz I'm still full of pride,
and I'll fight 'em till my life is through.
And out in the West, when they lay me to rest,
I'll go and just buckaroo.

(from Cannon eds. 1990: 20)

時代の変化についていけず、牧場での生活をやめてしまったカウボーイも多い。もっと効率の良い職業がたくさんあるし、楽で快適な生活もできる。なにしろ選択肢のたくさんある時代だ。逆にカウボーイをやるにも、その方がかえって難しい世の中になった。今やアメリカでも、カウボーイとしての仕事もできない、かっこうだけのカウボーイもどきが増えてしまっていやになる、と古老のカウボーイたちは嘆く。実に本当のカウボーイを見つけるのは難しい時代である。

「ほんもののカウボーイってまだいるの? (Are there any more real cowboys?)」、とニール・ヤングも歌うくらいだ (アルバム "Old Ways" 1985)。

乱痴気騒ぎの安酒場でコカインを吸っているようなたぐいじゃなくて
雨がもっと降ってくれるようお祈りしているカウボーイ
豊かな飼料がやがては金になり、金が入れば服が買える
テレビで見かけるようなダイヤモンドのスパンコールが
キンキラキンのやつじゃなく
働くカウボーイが本当に必要とする服
この国に本物のカウボーイたちはまだいるんだろうか

(対訳: 中川五郎)

もちろん彼は本物のカウボーイたちがまだいることとと思っているだろうし、そう願ってこの歌を書いたのだと私は推測する。厳しいながらも、昔ながらの自然と調和した生活と、家族の絆を大切にするカウボーイたちが。

1985年にカウボーイ詩の全国大会 (Cowboy Poetry Gathering) をネバダ州のエルコで始めた民俗学者のハル・キャノン¹⁾は、カウボーイ詩を通してカウボーイの伝統、文化を守る活動をしている。彼は、現代社会において我々のほとんどが失ってしまった、昔ながらの正しい自然との関係を保ったカウボーイたちのような生き方の重要性を強調する (Cannon 1993)。そもそも世の中に変わらないものなどないのだが、良いものは失われた後で、人々に残念がられる。いろいろと便利な世の中になってきてはいるのだろうけど、社会のあちこちに歪みが生じてきていると感じる人は多い。結局我々は自然をコントロールする力はないのだから、自然と調和した生活が見直されるべきなのは当然だ。

5 さいごに

カウボーイが、実際姿を変えてしまったとしても、いなくなってしまったとしても、いつまでもアメリカ国民たちの心から消えないのは、カウボーイというのが単なる一つの職業ではなく、ひとつの理想的な生き方としてとらえられているからだ。そして、そういった生き方が失われていくにつれ、人々は再評価をするようになってきた。カウボーイ詩が、ここ近年人々の注目を浴びるようになってきたのには、そういった意味もあるのだろう。現在たくさんの詩集が出版され、人々の目に触れるとともに、「それではおいらも」と詩を書いてみようというカウボーイたちも増えてきているようである。伝統文化を守る手段としても、カウボーイ詩は大きな役割をはたしている。ワイオミング州のカウボーイ詩人、ビル・ジョーンズがこう語っている。「たぶんこの生き方を守る唯一の方法は、それを詩に書くことだろう」("Maybe the only way we can keep this way of life is to write poems about it.") (Widmark 1995:16) と。

カウボーイ詩はインターネット上でもたくさん見つけられる。カウボーイ詩の大会なども、あちこちで行われるようになった。一生懸命にカウボーイの伝統文化を守ろうという人々の力を感じさせる。これはとても嬉しいことである。私自身も、カウボーイ詩の研究というかたちで、応援し続けたいと思う。そして、もっと多くの人々にカウボーイ詩の存在を知ってもらい、読んでみてもらいたいとの願いを込め、この論文の締めくくりとしたい。

参考文献

- ウェルズ 恵子. (1998). 「カウボーイソング (1) "A Cowboy's Life is a Dreary, Dreary Life"」 『英語教育』 5月号. 東京: 大修館.
- 山口 豊. (1999). 「カウボーイ詩考察その一: モンタナ・カウボーイ・スピーチ」 『岩手大学英語教育論集』 第1号. 岩手大学教育学部英語教育講座.
- Black, B. (1986). *Coyote Cowboy Poetry*. Arizona: Coyote Cowboy Company.
- Cannon, H. (eds), (1985). *Cowboy Poetry: A Gathering*. Utah: Gibbs Smith, Publisher.
- Cannon, H. (eds), (1990). *New Cowboy Poetry: A Contemporary Gathering*. Utah: Gibbs Smith, Publisher.
- Cannon, H. (eds), (1993). *Buckaroo, Visions and Voices of the American Cowboy*. New York: Simon & Schuster.
- Flexner, S. B. (1976). *I Hear America Talking*. New York: Simon and Schuster.
- Widmark, A. H. (eds), (1995). *Between Earth and Sky: Poets of the Cowboy West*. New York: W. W. Norton & Company, Inc..

(岩手大学教育学部英語教育専修)